「捨てる心理」の探索的検討

「捨てられない」のは何故なのか

○橋本 剛¹・大出 順²

(¹静岡大学人文社会科学部・²静岡大学大学院人文社会科学部)

キーワード: 「捨てる」行動、アニミズム的思考、サステナビリティ

Why is it hard to discard?

Takeshi HASHIMOTO¹ and Jun ODE²

(¹Faculty of Humanities and Social Sciences, Shizuoka Univ., ²Graduate School of Humanities and Social Sciences, Shizuoka Univ.)

Key Words: discarding behavior, animistic thinking, sustainability

目 的

東日本大震災の瓦礫処理から、日常生活の整理整頓に至るまで、モノを適切に処分するという課題は、多くの人にとって悩ましい問題である。この「捨てる」心理について、たとえば臨床心理学などでの貯蔵（ため込み）行動に関する研究では、過度の貯蔵行動（いわゆる「ゴミ屋敷」化）と強迫性障害の関連が指摘されており、溜めこみをする人（hoarder）の実態について検討が進められている（フロスト・ステイケーティ、2012）。自発的喪失という観点からモノの処分を捉える研究もあり、池内（2010）はモノ供養のひとつである人形供養を自発的喪失ととらえ、人形供養をする人はアニミズム的思考（無生物に対して神性や生命の存在を感じる思考）傾向が高いこと、アニミズム的思考が強いほどモノの処分に消極的であることを見出している。さらに、エコロジーやサステナビリティを目指したリサイクル行動や節約行動に関する研究では、安易にモノを消費・廃棄しない態度について検討しているが、これを「捨てる心理」の裏返しと見なすこともできよう。

このように、特定文脈における「捨てる」心理や行動に関する研究は散見されるが、その全般的傾向について検討した試みは、意外なほど少ないのが現状である。そこで本研究ではその試みの一環として、「捨てる」ことへの積極性（処分傾向）を捉えるための尺度開発を通じて、人がモノを「捨てる」心理について探索的に検討することを目的とする。

方 法

2011年12月、静岡県内の大学生に質問紙調査を実施して、243名（男性99名、女性144名、年齢 $M=19.5$ 歳、 $SD=1.2$ 歳）の有効回答を得た。

質問紙では、個人属性（性別、年齢、居住形態、経済力）を尋ねた上で、以下の尺度を実施した。①処分傾向尺度: 「捨てる」行動や心理を測定するために、新規作成された尺度。大学教員1名と大学院生8名による討論を通じて、捨てることへの積極性－消極性を測定することを意図した25項目の暫定案を作成し、「1. まったくあてはまらない」から「5. よくあてはまる」までの5件法で回答を求めた。②成人用アニミズム尺度: 池内（2010）による11項目5件法。原典では、自然物の神格化、所有者の分身化、所有物の擬人化という3下位尺度が想定されているが、本研究では因子分析の結果から、6項目からなる所有物アニミズム（ $\alpha=.80$ ）と3項目からなる自然物アニミズム（ $\alpha=.81$ ）を下位尺度として採用した。③サステナブル行動尺度: 堀毛（2011）による30項目7件法。因子分析の結果に基づいて、14項目によるリサイクル志向（ $\alpha=.87$ ）、5項目による節約志向（ $\alpha=.69$ ）の2下位尺度を構成した。④不決断傾向尺度: 杉浦・杉浦・丹野（2007）による15項目5件法。信頼性分析の結果、11項目の項目平均を不決断傾向尺度得点とした（ $\alpha=.85$ ）。なお、その他の尺度も実施したが紙面の都合で割愛する。

結 果 と 考 察

尺度構成 因子分析（最尤法、プロマックス回転）の結果、最終的に2因子解による14項目を尺度項目として採用した（Table 1）。第Ⅰ因子は単純にモノを捨てることへの積極性、第Ⅱ因子は何らかの価値を有しているモノを捨てることへの積極性を反映した因子であると考えられたので、第Ⅰ因子を単純処分傾向、第Ⅱ因子を価値処分傾向と命名して、それぞれに高負荷を示した各7項目の平均を、単純処分傾向尺度得点（ $M=2.68$, $SD=0.86$, $\alpha=.87$ ）、価値処分傾向尺度得点（ $M=2.26$, $SD=0.67$, $\alpha=.79$ ）として採用した。なお、いずれの尺度も処分に積極的であるほど高得点となるように設定した。

Table 1 処分傾向尺度(*は逆転項目)

【単純処分傾向】不要になったものもなかなか捨てることができない*／必要以上に包装紙や紙袋をためこんでしまう*／定期的には大掃除や整理をして不要なものは捨てるように心がけている／必要なものと不必要なものを仕分けするのが苦手だ*／使わなくなったものでも、もったいないと思って捨てられないことが多い*／不要になったものは迷わず捨ててしまう／いつか使うかもしれないと思って、ものを捨てられないことがよくある*
【価値処分傾向】思い出のものは、本来の機能をなくしても(例: 壊れた時計など)捨てられない*／高価なものは、自分の好みと合わなくてもなかなか捨てられない*／人からもらったものを捨てることにためらいがある*／思い出の品でも、もう使わない過去のものはなるべく捨てるようにしている／人からもらったプレゼントでもあまり迷わずに捨てることができる／まだ使っていないものを捨てることに抵抗がある*／たとえ自分には不要でも、使えるものを捨てることに罪悪感を覚える*

尺度間相関 まずアニミズム的思考との関連について、所有物アニミズムは単純処分（ $r=-.21$, $p<.01$ ）、価値処分（ $r=-.38$, $p<.001$ ）の両方と有意な負の相関を示したが、自然物アニミズムとは明確な関連を示さなかった（単純処分 $r=-.13$, $p<.05$; 価値処分 $r=-.10$, ns ）。特に所有物アニミズムと価値処分の関連が強かったことは、価値処分傾向の構成概念妥当性の論拠のひとつと言えよう。

サステナブル行動との関連としては、リサイクル志向と単純処分傾向に弱い負の相関が示されたが（ $r=-.16$, $p<.05$ ）、リサイクル志向と価値処分（ $r=-.11$ ）、節約志向と単純処分（ $r=.04$ ）、節約志向と価値処分（ $r=-.01$ ）はいずれも関連しなかった。したがって、処分傾向は環境配慮行動とは基本的に独立していると考えるのが妥当であろう。

不決断傾向と単純処分は $r=-.50$ （ $p<.001$ ）、価値処分とは $r=-.26$ （ $p<.001$ ）と高い負の相関を示した。特に単純処分傾向との関連の強さは、下位尺度の構成概念に合致する。

まとめ 本研究では、「捨てるできない」ことには「捨てるのが苦手」という単純処分の側面と、「価値あるものを捨てることへの抵抗感」という価値処分の側面という2つの側面があることが見出された。ここから、近年のリサイクル・エコロジー志向やサステナビリティ重視傾向が、安易に捨てることを抑制する風潮にも繋がって、結果的に人々がものを捨てるハードルを一層高めている可能性も考えられよう。